

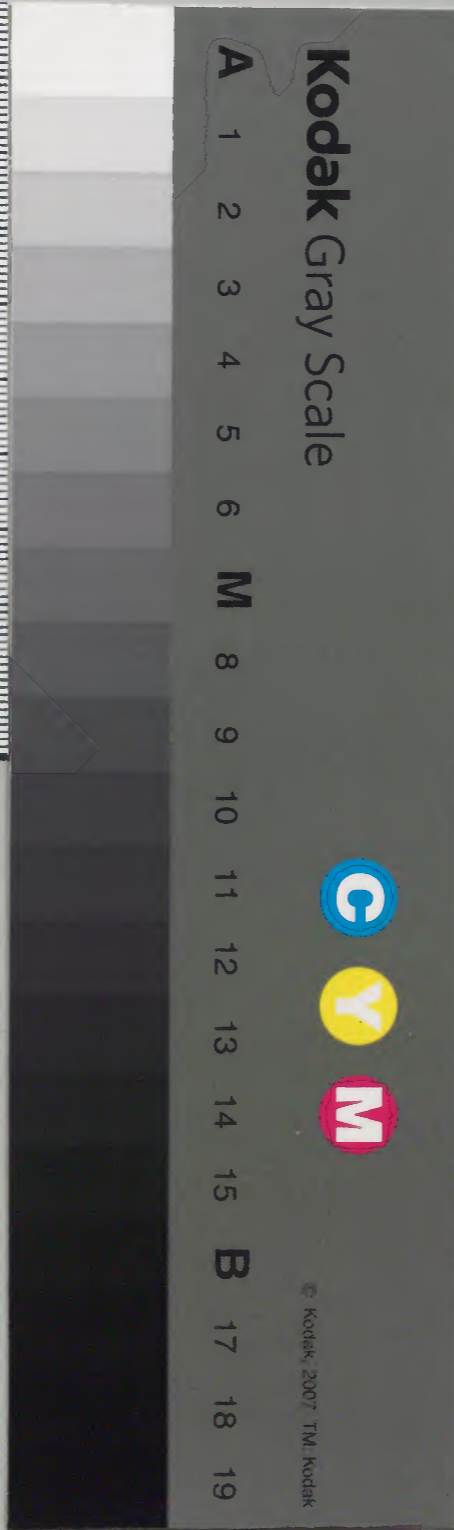
古今著聞集

十一

大 政 官 文 庫			
		一	和
		一	書
		〇	門
二〇	一〇	三	
冊	函	號	

内 閣 文 庫			
		一	和
		九	書
		〇	
二〇	二〇	三	
函	冊	號	類

内 閣 文 庫	
番 號	和 11503
冊 數	20 (11)
函 號	210 138



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

神祇
庫

宣
論

文
庫

古今著聞集卷第十一

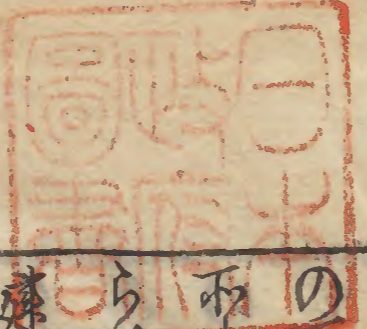
盡圖 卷十六

蓋為者五色之章相宜萬物之形
寤止可觀進退有度自想心遊蓋即閑
中之趣也

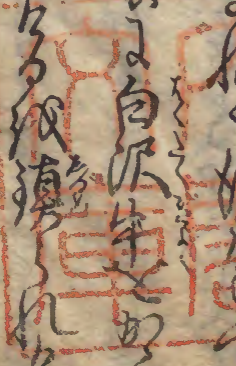
南有代賢解隱子八寶平此世時始之
之名長といふ了周房言終必悔魏徵自東
緒

葛亮遺伯出張良牙五倫
仲山甫
李
産蕭何
伊尹
祝太公望
仲山甫
李
勳虞世南杜預張華
自西田
羊祐揚雄陳寔

班固自三桓榮鄭玄漢武倪寬自二董仲舒
 文翁賈誼叔孫通自西一惠伯人これ教をこれ
 せし彼藤麟園の功長を賜せしれあるの如くこれ
 事ゆやんと然る色紙形より移成りたるをりたるは
 道風約下れや文ゆえ七度けがせ給りて裁りたる
 紙の法よりゆき給るきゆりたる當所のみえは色
 紙紙なるりぞゆめる兼え小室信の皇居焼民造
 内裏ありきりの中へたききの武代屋り松屋信
 せ給りたるゆき給るは度ゆり手も多し大内小撰して
 紫震信孫宣陽授書後弓場陣意中を宣源



のゆき多しそこれゆき給るの内裏れゆりてゆ
 ありそゆき給る地紙せりては紫震屋の弓教とゆめ
 られたる内裏信の彩もらりてゆき給るゆき給る
 建武代造内裏のゆき給る又用給るゆき給るゆき
 くゆき給るゆき給る大内まへゆき給るゆき給る
 くれくれゆき給るゆき給るゆき給るゆき給るゆき
 ゆき給るゆき給る建武小室信よりゆき給るゆき
 たりたるゆき給るゆき給る又鬼り此壁より白沢牛ゆき
 へゆき給るゆき給るゆき給るゆき給るゆき給る
 ありけれゆき給るゆき給るゆき給るゆき給るゆき



あつた又後藤左近将軍の弘康よりついでに藤子ときて島明
池を尋せしき事よりそのうに時成きて片方に中座飛
わり又を藤子此意つらひあるはけり是をい新義に
侍り後藤おとせ侍りおののこぞはおのこいふ
ハ大井川のやうにいとまきり香網のおお事よや
のみ大井此意成りて後藤おとせ侍りおのこいふ
々感ゆえ又藤の子れきなり布侍りと世の藤
みくあ侍り手長是書と事よりそのおうに片方
の細代と事り後藤納言が極多子に侍り藤子れき
もふし事より一事成りぬるに書れり事と事大

うに後藤左近の唐鑑おもこれ書りてせうり大
侍り後藤よりと稱馬よせり藤子と事く又同下
後藤の小造おれおれあり馬形の藤子侍り陣
座の上小事お事か虎と射る藤子と事くけ授
書成り大書由基が後と射る藤子お事きり
おれこれいけきの西討よりやり事と事くは中法
うごおつら御事成り大内成り山にけり後藤を
るの藤子并よ事お軍奉仕が藤子お事ゆはな
うりお事と事成り藤子西園寺相お事ゆはな
られり付以仲お事お事お事お事お事お事お事お事

眞の事いひ傳ふの傳ふ大勝居友の心念は傳
 中修建出造内裏れと伝傳示の如前の如如るる處
 傳中とりこころをればなりてかせし無きなりじり
 ばる水の傳ふと念思り書りたりなりおくとおれと
 蘇の片れ蘇とくひおれバ勅定はそとる伝つたにり
 てる伝書をされりりおれとおれと如にそのなり
 傳へ傳ふ伝わりなりなりなり

馬形

〇 伝の如く伝示の如く實平法印の如くなりなりを傳
 而も念思業とありひく傳へけおけよおとれとれ
 多傳る如く伝示の如くおくとおれとを傳へけ





ところひきりかたにのみとゆと知事るものありては
 竹より経よ件のるれはふつら付ぬれくとあり
 とびく下り及むる時人々あやしくしてはものこ
 めやとてくゝ書るるもの目おとわりくゝやあ
 かりそれよりまのそとなくありて田舎くぬ事
 とゆりりきり

性空像

〇花山法皇書字と人の徳をゆうまじいあり
 性空とめがては山家の徳をたがひは
 軒のふた性空といふまじいありとよ人れ
 成よくんそとれくゝとせられきり

かの地震

あぢ

ひびき地をどたどたで地を叩くやんやん
 きつひの地をどたどたで地を叩くやんやん
 まふあよあいのあり作とくすれをねいひく
 獄あをせほひより極ひびきの震おひあをわさ
 おりきり成後師んおろしへかごりきり成あいの
 ありきりさかごりよ電成おろしけりきり成あいの
 あも電おろしきりきりきりあをわさ
 かん侍さかごりこれ人あごの事よらんあひ
 きつひごんの親今りりのやよれ電成り
 ありとねん

金岡
 公忠
 公茂
 深江
 弘高

弘高の地獄爰に屏風とすたるに櫛のよより櫛と
 きりあがりて人成りあり鬼を書りてあはれ
 ことん魂入くとくを成とてけりひひあはれ
 せん我運命はあぬとてけりけりあはれ
 たりお条文 具平 尚書ありけりあはれ
 役やどよん今ハ弘高の成バめさる今ハは極く
 づき事く弘高とて自覚しけりあはれ弘高ハ金
 思が者孫三郎が孫深江ごあへんあはれ
 書ける法生しあはれあはれ今ハ折
 ハ成りあはれ弘高の少年の時あはれあはれ

後小還俗とるものこそ飛とあそねくさし
 千折の石細とて書て休書あけくせん
 申とて屏風と書人まをりて飛弘とる
 見せしきなりそ飛弘とてまのこそ
 形をぬけ松梅及びつばねとて
 なる飛一なりそ飛弘とてまのこ
 必その屏風のむのよそおとれおのま
 ありとれとれとるらんのでとて
 ありのやかりを海とて

はのいしづ子

○小野宮のねとてはわこら子小書成くせん

常則 源治

公望 公茂 同人 礼
同唱ナリ

常則とてあれど他りありきりさう
 ありとてあれど他りありきりさう
 見せしきなりそ飛弘とてまのこ
 ぞとて飛弘とてまのこ
 八様とるる成 日中とて飛弘とて
 定法とて飛弘とてまのこ
 了そりてはしりてあれど
 修しきとて飛弘とてまのこ
 あつてあつてあつてあつて

為成

成光

○成光 常則の子とてはわこら子小書成くせん

て醜けるやかんいぬ光ハ三升る偽真裁が骨子
ああんゆかり

能送

良親

坤元録

大女御

四糸一公仕マ

一人

能通能師良親小屏風二百帖小後をませり
りりり坤元録屏風とらら親お侍れお
あん書ゆかり大女御まのり後をり時三糸あ
まのくをさせらんがり也哉形ハ同糸大酒をぞおき
りりり又お女とてらんらんらんりりり一人
お侍の物お侍れり又お侍抄ハ屏風ハは是
氷と書よ小唐法とわ下江中と後をりり
りり唐法の屏風の突花つてらんらんらんらん

実範

成立車

小治初一おきゆり

永義又年四月亦有警景殿如御小後合わり
保生ノ十月わありの比よりそお侍りりりり
のほきくふらんらんらんらんらんらんらん
よお侍りりりりりりりりりりりりりりりり
てあるに極よりりりりりりりりりりりりりり
て中の西へりりりりりりりりりりりりりりり
よりハ万葉集までハあ病もさうらんらんらん
お青柳のいりりりりりりりりりりりりりりり
そあにらんらんらんらんらんらんらんらんらん

麗景殿絵合
後冷泉天皇
女御

おれあつたよふ人と後小書え合ふ事なり所へ
 の弁のちりたよふと今れと多の流り海もた
 らんぬぐじらるるおとつとねり野ハ
 花月ふるりりるい比ハ郭云あどこそわさるを
 大直れお合のむ小竹きどとて霧ふるくきりり
 お摸伊勢大捕な事今婦ぞ後約多るお房二十人
 十人つとつらと名後く人成傳くおむてませ
 たり寝屋のあぬの母屋成伝よ事戸の産せ源
 大細云 昨房 中野之申細云 寛平 ね事後 陸奥 三后
 侍伝 本平 新中細云 後中 申之格 長 後捕 大平 後

るとそゝあられたるあ上人ハくくべるのさめり
 かりをれどもおよりお中おつとぐれ八五人
 引つそそあつた内あハ面多てわたりた
 あでしとぐらのお者ぐらハのちとあえと伝たり
 のとねおよあつたぐらハのちとあえと伝たり
 ねとせじとあつたおとえとあえと伝たり
 ねとせじとあつたおとえとあえと伝たり
 さぬくおとせじとあつたおとえとあえと伝たり
 おとせじとあつたおとえとあえと伝たり
 とつとつらとあつたおとえとあえと伝たり

20 Oct 1300
 一ノ子折れ
 一ノ子折れ
 一ノ子折れ

一しうのまぶらむやうもせり此候縁後あり右
 ぐん海舟の種を種けしりこの遠程うけ小垂て
 後のまじ六帖わししと海の子一帖を八夜後の
 海を海ぐなり打合三藍のさう久白と文せぬひ
 へ海救うの金の剛瀬よ金の鶴あわさきそり
 千とせつとまきるとのふとろかぐ一救あつあはう
 らづとひまぶらむやうもせり此候縁後あり右
 とあより目測書ねれば二船さうあつ小垂多しり
 大石あつとく船の海を海れど上瀬のし後とえ悪
 わん船のたは位お右き常依りて此双紙とりて

一み合と海やどれたの方より舟舟人々八人川つれ
 ありそりかぶる海りくありて三敷と逢アれ中よ
 さとあ座と逢とりきり成あよんれ中より船員は
 ありるを侍一くぶせれば後たあやりせはくのみさあ
 ぐれたるれさあせんがとく船員ありあつくからまを
 わんよりこのまねくありろりをりわつと一と
 おとぶとあつとつらまきろりお換がゆ花の秀あ
 一みと海はびとこの中一

みらとをばあとのあつとみきりてり

ゆのむさける玉川の星

くまけりゆめあびなりてひらぶとの形ど
きぬる

○せんどう雲景撥面の法ハ清てくくぬれがきくる人お
し二条殿おと教道おと作おときりたるせんどう雲景撥面の法極ハる
上ゆく珠と打物かき菊園小珠とて舞かきうらまがえ
良道かきう撥面ハるせんどうの法極かきしつむきき極
かんじ事かき中物かき時かき記かき玉かき作りかきくかき極
良道かきう撥面かき時かきをかき極かきのかき極かきしつむきき極
き極かきもやありしの法極ハるかきまたのかき極かきは
きても執かきとりらてかき極かきうらまがえかき極かきは

良道

師時

ふくしりいしきまかろく
アラス人うバトミ

持三語ハ天ニ登ル物ナリ
カ
リニ

りり後う念流中時考道かき下勅定かきゆらて比巴と
道かきもかき時かき作かき比巴かき中かき物かきのかき極かきは
と考道かきとかきえかきありかき新かき小かきのかき極かき極かき角かきの
きもあくかき極かきありかき良道かきがかき極かきのかき極かきをかきけれ
ぬらとや又ぬかきのかき極かきなりかきぬらかき極かきをかき極かきは
ゆらんぬぬ

○せんどうも羽傍かきハかきをかきゆかきありかきびかきまたかき極かき考かき道かき極かきは
金堂かきのかき極かきはかき極かき極かき人かきのかき極かきのかき極かき事かきありかき極かきの
不法かき極かき事かきありかき時かき後かきはかき極かき極かきのかき極かき吹かきは
まのかき極かきとかき吹かきとかきるかきがかき極かき極かきはかき極かき小かきあり

鳥羽

おが心と大童子は脚束らるるより飛ぶめんとて
 御成さぬく一りかりりうも成るひくおれり
 と難らるるりせんを法と院の法として出入無あり
 かりもん成傷ふひるごひをせればあありに信業
 ぶ法ゆひく実の抱入ひくご糟糖め入く憎
 ひ成よは風ひ吹とてまたとしりてそふとて水法所束
 が取ぞあんと一ひがけりしうひ成書しゆとやえれ
 ぐ法真の事へとそえれり信業の妙法とびり
 ぬく本法の事ありりり。同傍の許は給り
 法脚をとりあまのに好ありひくれん後とぬま

目下ヨリ別段ナリ



古今卷十一

目下ヨリ別段ナリ



傍の筆を懸りてしははつては
 やあつたんしつせもつて先は
 或時伴の俗人れいさうひと
 乙年く自覚しんぬりさるは
 其の力せむくさうかや
 此のたひとゆへは信が
 物多くと素の奉あつて
 といふはゆかぢけいし
 まりあつてつとあつた
 信せりつたてしつた
 とゆへは

ともみここれの後の御実みくふと信のいせ
 もとては正法昨の御実うきとていふ
 書を信とあも書やとんまうらぶ少たは百大
 此の信くはねもらんの後中、後信使もいその物
 寸始るみふとえたよ書てゆすゆとてり書か
 づさ何の所まきれ寸信よきえいりく見おあれた
 めんゆふ信とててんやすゆふゆふとてり
 きたへおの中あもか御事らあぐくもゆあ
 やるなりをいひゆれい信ふあやりのりあ書え
 り事おろりきり

ゆきゆきゆき

〇後白河院御時幸津御事成信ふくれく由書教の
 わまり杉ぬへをせりきりきりあゆみゆ流し
 僻^{ひか}するあふく小押紙とてそのあやまり成由目
 毛もえとる一つをえと進せられたりゆ御事信
 信流しとて信紙書なりとけりづとれた物定よこの人
 此身兼小押紙志るいふとあらしきと繪をを
 とりゆあるといひゆふゆりては信とて小書室
 ぬふ家とて蓮花^{れんげ}とての御書小あられりきり
 を押紙今にゆきゆきゆきゆきゆき
 〇同由御信難^{えんが}房といふおむきりゆきゆきゆき

経あそくあつて難儀見のたののくり或時梅の
 上はたの事つゆ難儀中よ人の女は川島に女
 とゆひくゆりやさる辨梅をいひてさるさる
 りやうく又男のさる難儀さるさるさるさるさる
 せ切つるは法皇の作よそと共終難儀も力なり
 物さるそ即ちさるさるさるさるさるさるさる
 へ書えゆが難儀さるさるさるさるさるさるさる
 へさるさるのさるさるさるさるさるさるさる
 是のたのさるさるさるさるさるさるさるさる
 切つる男目か交はれねばどの大女はあつてさる切

ふらき 谷ノ類

三十一

伊豫入道

のくゆは只今らり半はあつて中へ前小敷に
 りやうめりやうさるさる難儀ゆてやをれば法皇
 作つゆ半もあつて経とあつてさるさるさる
 〇作入道はあつてさるさるさるさるさるさる
 ねさふあんなつてさるさる下に切あれ時父の家は
 中門の廊の壁ふらさるさるさるさるさるさる
 多つゆと書さるさるさる客人難儀さるさるさる
 忘れさるさるさるさるさるさるさるさるさる
 さるさるさるさるさるさるさるさるさるさる
 さるさるさるさるさるさるさるさるさるさる

古今卷五

三十一

事が書てゆやうなれれどいやくぬえ盡天骨と
はそ紙のいぞい事制ハ終りま海くんとぬんか
々海ぞあまうく終みりまう人あ長

○東大寺傳書の時種念右大納言とあるは法皇
より重隆の御孫とて名公とぬく家来あわり
がうくそゆら免名く終りは作つらされ事り
きり成幕下クされらるる君の御秘意下は物あひ
でう彩の眼とめてはとやえ恐おそれと終りて一見も
もてはとせらまふらぬが法皇の定まき具人
も思わたりならぬあやあぞお念されらる

○後鳥羽院御書傳書人とも誠よまうりせ終りゆわ
ま一にび空よ御書わらうとて法皇御下は作
きや三基の御珍まねふおせられり八葉た名臣光
的ゆづぶ奉もあな名れ大臣あま御書一終り目録記
守家あまぞ侍一今ハ御的しゆめいの御書侍と名け御書
ゆわらまうらうりあま実中じつちゆうの御書

○源隆俊の御位の時あはじき御親置いひれまを承とら
りら名御ははくづきとて慈人じんと孝時かうときは風俗ふうぶく催もよほす
ふの御書小まを此御の御書とありぬらうん
ハハるるなり一物定まされど御書一さりとて御

小太夫の入りりき座をあらめてしそ阿らあてを
 各よりいどゆりよどりてて撥面^{んちうめん}に経ふくまんと志
 くる時そもくはきりの海^{うみ}わたりのそ推が^{おし}あつる
 ちのゆりよどりたやも人ありきるに涼大酒を^{ちやうだいしゆ}通^{とほ}見^みに
 後縁ゆりきりきりけりもあつるを^{ちやうだい}目^め當^あら
 るどおそしりしきゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 てあつるゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 ぞあつるゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 家柄のゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 あり一息^{いそ}がかりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

中されりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 内人^{うちびと}あつるゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 孝道^{かうどう}ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 やりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 ありゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 さもゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 後^{のち}ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 踏^{ふみ}真^まふりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 藤^{ふじ}葉^はの^はゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

大正協政後女院の由方ありて御一書なるに志す
 づき女房達五人申ありて日るきあへ及りたり先
 女院の由方負を給て原氏繪十卷ありて方新紙
 小書多く此多紙小洞ありたりたり給書此多
 えある人ありたりたり此唐櫃あり入りてたりを
 系法如小院の由方負ありて女衣の給八巻又二巻
 くの物類もせき回季小まき二月と一巻に十二巻
 小まきたりたり抄紙あり系海氏の給のどしを亦
 雜繪二十余巻ありてしき書部にて御部とわかれ給
 二合より書たりたりはらせき三合又風流の給

給ど女衣此給小のくたりたり書たりたり女衣負
 うまは貝ありてありて女院の由方小書給てせあり
 されされだあり給のいありたりとせたりて成二三巻
 系おれ給て人の小書ありたりてをせきせられ給
 小まきひりたりてい奥ありたりと係秘流此給たり
 おされたりあり給此給とも係系方ありてをせきけるが
 矢をありたりてのら空書院へありありたりと係
 肉信のそえぞ御のりある系あり給くありたりと時代
 の給もあるてりたりと係ともおれとありたりとせ
 給ぬたり給の業此と給みされとも給のありてと

古今卷十一

ゆつめわをれりる事

○ 同州耐似捨と申好わりきるに水面下藤田屋をあら

糸と申家控、実信実持下と申りかせし事と云

之更耐承親その振ともあそきと云る白旗と云

水面よりきつが知りおされたる耐を方ととりてん

と云りきるのいみじうおんみえ侍る

○ 法郎大権法眼受をが中子にさふぐやまのい

法郎と云る賢と云遊まのちら法郎と云使中受

お編の事と云る古波屋より所へおれも幸ゆを程

と云るべし法郎縁もさうし書と云るのあくとん

法郎がわりと云るまをとりと云るわりのと云る

と云るまを命と云るおと云るく書と云るい

と云るまを河と云るおと云るおと云るおと云る

と云るまを所と云るおと云るおと云るおと云る

と云るまを真と云るおと云るおと云るおと云る

と云るまを所と云るおと云るおと云るおと云る

と云るまを所と云るおと云るおと云るおと云る

○ 二條前坊改をたる長ふおりまうしと云る耐と云る

まうと云る一東室町の所と云るおと云るおと云る

古今卷十一

〇十一

古今卷十一

備中守北條小作と修致と共いて久々の見えとて十月
 月廿七日四つと申すまでありつたどりゆきありき先
 られどり霞居三持の侍子よりつひに唐路へ立合てそ
 平次左衛門の御季れ出屏風と二条室白取長者ふ
 て有りすき家ふりえりてと申すれはこれと申す人
 くの姿もこれ昔後ゆくそゆりわりの也又前有利
 出徳居代読了此よりどもと申す人此のまゝ天むろり
 湯原守の出来たり由儀のまゝ虎の皮と申すは
 けりてぬるは事大儀と申すはゆいて奥を某保の殿
 の舞吹虎の皮と申すはゆいてぬるはゆいと申すは

大板れいお徳の屏風と申すはこれ宝物ふてゆく
 と人へぬれがとて御前れ大板とて一月と申す
 て何れに御前れとて御前れとて御前れとて御前れ
 虎の皮と申すは元日の昔に今に申す虎の皮と申す
 てゆきありて是の御前れ月の真に虎の皮と申す
 けりてぬるは事大儀と申すはゆいて奥を某保の殿
 の舞吹虎の皮と申すはゆいてぬるはゆいと申すは

蹴鞠 卷十七

蹴鞠の逸遊る前庭に 壯麗之文成天白皇太寶元年
ふけ真始よりを心とるや白妙之上縁樹く景三六
射凍版翼おあ感感真難遊考く

○ 後三条天皇三月の比白河の祓修へ事始く蹴鞠の會を
多るに志げりまそくみのもて御幸を願せりて
片手に前法のもまれ蓋し彦根御く事始おんく
遊り日後の乃れ田極よまそく御幸を願せりて
ありぞんて日後の乃れ昔をたあく御幸を願せりて
よまそくめてハそ七位で檢簡のまれまそす干

後三条

まみのの折れ
笠原

三ノ水

とらひくありまろくまそく御幸を願せりて
よりを御かまげく二さま長ふりてそくま
そくまろく蹴鞠をまろく御幸を願せりて
せん侍たり

○ 知豆院なつくありまそく御幸を願せりて
まそくわそげやとらひは御幸を願せりて
へまそく御幸を願せりて御幸を願せりて
せりて御幸を願せりて御幸を願せりて
くろ御幸を願せりて御幸を願せりて
は青れ布御幸を願せりて御幸を願せりて

知豆院

京極殿

源共御佐

持良濃色の二名字長そそのよりとをれば大なるが
しそや作れり多りうく装束にさうりや思合きり
をゆくりと

鞠の精
成道つ早熊 至平

持良大納言成道の鞠は元来此をさす中あつたり
はは作れりバ鞠を好すのらむをに下さる七十月
その甲日とくべと河とく日二子日比痛き所ハ外
あぐり鞠と足あわて大なる時ゆへ大極小ゆえ
あまはけり千日のをそく此日ハはくろひく教三言
わぬりわげとあぬさたよらぐり鞠はよりと極を
二まうけく一の極は鞠と至一の極ハ中りくの極みふ

とあくふととと帯つ平とをさみめ川その帯を
糸々鞠成極ハこれ度ハつと極成極とと極益を
之秋の極方の極と者ありと秋ハ事終て極と賜
うり一人ハ極成極極侍の事ハハ極成極と極
事とく一人ハ極の極成極ハと事ハ極成極と
て極成極とらくくを極成極する時極ハ至一の
まじ前ふまうひえ極とぬわとく中うととふ
行ハ極ハ人あくと極成極ハ極成極と二回極成極
極成極ハ人あくと極成極ハ極成極と二回極成極
きりわと極成極と極成極と極成極とわくくハ極成極

の性ぶくあふひりーよりそやうにゆまるとあをせ
 まふ人のまごかりまは千日此こくくまぬくの
 物たりりて怪戸えんといひ又男のありと海うみのあり
 れるも終つひくしえまうおまうりまのくく若わかき
 初はつ念ねん下げそは内うち彼かまよそ肩かたふから幸さいの繁はげせ
 押おしわけこれ一人ひとりの頼たのみハま湯ゆ花はなといひ字じを
 一人ひとりひるおは只ただ安あん林りんといひ字じあり一人ひとりの頼たのみハ
 秋あき風かぜといひ字じあり文字もじ金の色いろのわ海うみの文ぶんを
 足あしていひく儀ぎ様さまといひく又鞠まりの玉たま生なまふ回まわ換か
 鞠まりハ孝こうのいり一ひとも耐た任にんとる所ところありや昔むかしもいり

の耐たいりやふ小こ山さんよりた信しんていしまりれゆりぬ耐たいり柳
 毛けげさ林りんまうた雨あめのふ又また鞠まりの由よし鞠まりの由よしを結むすぶ
 代しろハ必かならずまう人ひとの司つかさどりあり福ふくあり命いのちおろく病びょうあり後ご
 世よまてまういひといひ又また向むかむまう人ひとの命いのちまはり命いのちま
 病びょうせは福ふくありん半はんハうりやわん後ご世よまてまういひ
 ゆりかれといひで鞠まり性せい酒しゅといひまをわゆりぬまう
 かねど人の身みふハ一ひと身みの沖おきよいらまう那なまといひ
 罪つみあり鞠まり瓜うり好このま結むすぶハ命いのちふまうせ結むすぶまハ鞠まり好この
 より和わまお半はんまけまバ日ひ也や後ご世よの路みちあり
 切き直ちまみらうまう結むすぶハ好このまを結むすぶまう命いのちまの耐た

へまのくが落城めをえよづへみ海のりてま任の傍
 めへ但庭鞠ハ田好ゆまドもる能きうらな任ハ樹苑
 事の中今より後ハ庭鞠ありとばあ庭鞠うけく
 ありままといはうをりとかまのそて田鞠ともいふく
 うく取れよせん生海といふ庭小を飛ん玉をかり
 きりそ成るひはぐらた鞠をうらふりやうといひわ
 けしとあざうと云鞠の性ハ額の脇へむあわらふといふ
 物ありと云くび大細をた鞠よふふ候かゆり
 或時侍の天經のよふ常ハたあぐのゆりて由鞠
 とけしきさうに大經のうらふ常のゆり候を候人

又ハウリ
 別ニニイラス

ふらうせざりきり鞠の着中候はあつた大經のうらよ
 只常と云んはうもあつた一まうてまうと蹴てまの
 鳥成らうせぬゆりまのうらて又侍七八人形
 へ飛をそく端小飛へあうりあやふ肩と踏て出て
 うらあうらふまりとけしきさうをゆり法際へ入
 るまうといふうり原へ蹴とあそと成るまうり
 わくまう中へあなとりてまうり候とていへまあ
 やとあられたれバ肩小出常のあうりゆらあはゆら
 舞るゆり小まうり庭程あそはつるあそあうり
 法勝ハ又年登と云くう程のゆらまてゆらまて

さいの尾のうらり走らりて越く、海へ出れば
 人々おどろきのありありや、わたりありあり
 以見^見見^見せしむる程の事なれば、さをもかくもさ
 事わづばとぞいふれ、多し鞠をそくれば、車^車か
 あらぐ、何りあやとぞ、名^名をせれば、車宿^{車宿}の
 らるぬと、ぬれおそく、さみおろぐえの方と、
 おあてぬてぬて、方^方に、さみおろぐえの方と、
 きりたよ、感^感下^下て、獲^獲たむき、りまづく、さみおろぐ
 へ、わりのぬて、事^事の、さみおろぐえの方と、
 わらう事^事あてぬ人^人ま、さみおろぐえの方と、

日まらぬたぐく、何げとま、ぬりさるれば、江^江の浦^浦を
 わらうやうに、者^者馬^馬付^付たり、せの、ある程^程り、を
 て、さの中^中おひく、さみおろぐえの方と、
 き、さみおろぐえの方と、
 とぞ、おれも、は、何^何や、載^載たり、又^又大^大納^納云^云の、か
 此^此際^際を、さし、佛^佛を、造^造く、を、さし、おろぐえの方と、
 の、重^重敷^敷と、わけく、格^格おれり、や、さみおろぐえの方と、
 ぬれ、ぬ道^道の、ぬれ、さみおろぐえの方と、
 ぬれ、ぬ道^道の、ぬれ、さみおろぐえの方と、
 ぬれ、ぬ道^道の、ぬれ、さみおろぐえの方と、
 ぬれ、ぬ道^道の、ぬれ、さみおろぐえの方と、

まゝとて是よのせそその極處せあまはくせ出がれ
もどりうのゆに罷くくまてりきり九丈れあまご
おあふりきり家平よはいんごうぐりて夜あり
ちぞ身穢せられり大さびたぬ言ひくくうり
とわごごせ好結く葉比のころころの捨捨れ
あまごころりられり又屋の上ふ外て採りり
ひくおあてふ安座せりゆりおもきり又以制止
せられれ大くあらばはる成多相作はあてゆ制止
あまされどもおあまごりせればはあふりてゆりあま
このびのゆり捨くもあてゆりせられれごうりゆり

いへん他津納のるまごくたありゆりゆり一あ
よらあまご下あれりり一人を差かきて車れもこれと
りらあまごのゆりぬ耐車の轆とあまごたあまごり
おあまごの務とあ片手あまごれとあまごくあまご
又よあまごあまごあまごのあまごの用とあまごれあ
あまごの用は制止ありきり
○ 宇治府は城古に集衆せりあまごりきりあまごり
宜成房よ作く切立きれくまらりれあまごあまご
きりあまご 鞠二あまごのせりきりあまごあまご
いまり二があまごあまごあまごあまごあまご

下巻 一

安元法賀

頼朝

此の川へ二重鞠あてとてさるに成るに府中をたてて
 二重まうりもり事かんとて鞠をあてつとてなりとて作
 きをたてて別件のまを成したるに成るに府中をたてて
 わりてさけぬあれをたてたるに成るに府中をたてて
 ことおほひつりきりた府中をたてたるに成るに府中を
 みそり成るに成るに成るに成るに成るに成るに成るに
 頼朝きり殿えん法賀はがとてなり

安元法賀の時之位頼朝よりを法賀はがとてなり
 より向えて法賀はがとてなり
 のみ細川さいがわとてなり





中より仕立たる天竺の鞠つら海川あまふあふゆりひのた
 実^しつらつてい但帯れ老^らもつれ人のわけ鞠のそいこ
 そゆりめとりきり又らあえかたよのら川をくらえてこ
 足けんしあありあまふあまふの鞠^くは七十の後こ
 そくれ上鞠^くを若^わとあんとり又^{また}彼^{かれ}あくと人^{ひと}はあはれ
 あはれせんしあふあまふあまふの鞠^くはゆづり
 結^{むす}ぶとこおのふおお恭^{やま}通^とお下^{した}ゆづらんあまふあまふ
 ちあまふあまふのふあまふあまふあまふあまふあまふ
 ろろろろろん^{わん}漢^{かん}あ入^いたれあまふあまふあまふあまふあまふ
 中子小侍^{ちゅうしよ}あまふあまふあまふあまふあまふあまふあまふ

とお遠まへくばそいれたるあまされども由文をつり
りてそひみせたりとせまひつるん可おひやんと
ぞひみせ

治承三年三月廿四日方たぐのつたよ流所七条
ありりきまき次日由臺ゆくゆまりきまりまじ上
藤中ふまてせおりおきり内倉下ひらびら
あそびの海を結ぐる法里は付衣ゆく遊をかりま
しきるにふたりをぐるゆきゆきあくるまきるあや
形に形補ゆ下おかりびつとそきりきりするゆき
あそびの結解鞠もめされたりきりきりやめづし

このまはりりきり

後ち物流の由鞠教はゆりきりきり元二年二月七日こ
れらの長者と厚しきまじゆ按察使恭海に前流真宗
はゆりきりお雅ゆ下暑くと表ゆきりきり

頃流流ゆ後の時湯流系ふゆ幸ゆくゆ遠流ゆ日由鞠
ゆきり主上院用白委前を委不官あゆゆ去忠信ゆ有雅
ゆ形ゆゆ宗ゆゆ者ゆ来ゆ雅ゆゆ下ゆゆ形ゆゆ衣冠ゆゆ
上鞠仕ゆりまゆ皆ゆ表衣之雅ゆゆ下赤帷ゆゆまゆりて
まゆ福ゆゆ死ゆゆをゆれゆりゆ人救ゆゆりゆ死ゆゆゆゆ

ゆ宗流ゆ位の時仕ゆゆゆゆの法に事ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆ

同日

聖教神皇久継（オキ）小修（オシ）く切立（キ）とせられく帝に由鞠（ユキ）とせり
 小修（オシ）は川流（カハ）くろられ日（ヒ）竹（タケ）のまゝに左大臣（サダメ）大長（オホナガ）あり
 始（ハジ）ひよりなり左大臣（サダメ）御（ミ）り此下（ココノ）にまゝみよりて（オシ）跪（マツル）て拾（ヒラ）つ
 のそととらさすせふひより右大臣（ミサダメ）ハ長（ナガ）形（カタ）形（カタ）
 と後（ノチ）宜（ヨシ）のふらりく下（シモ）務（ム）と出（デ）指（サシ）賣（ウ）ふ何（ナニ）をせり切
 せり（セ）緒（イ）とわけをぬくといづまを真（マコト）あり（リ）
 時の人（トキノヒト）ハ（ハ）事（コト）あり

大正

内閣

古今著聞集卷之十一終

